

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

●事例 1

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

- ・複数の研究室で指導を受ける学内インターンシップを開講したが、当初、受講者が5-6名と非常に少なかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

学生を他の研究室に派遣するとその間の研究が滞るという教員が複数名いた。そのため、学生の積極的な受講を勧めなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

受講した学生からアンケート調査とインタビューを行い、良かった点と改良すべき点を洗い出した。その結果をもとに学生にとっても教員自身にとっても視野が広がり有意義であることを個別に説明し、2年目以降急速に受講者が増えた。現在は、20名を超える。

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

●事例2

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

ゲストプロフェッサー制度に対する教員の理解度。

ゲストプロフェッサーの候補者を教員に推薦してもらい、運営委員会において決定する方式をとった。その中で、プログラムの教育的な趣旨を先方に良く説明しないまま推薦する向きが一部にあった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

一部の教員において国際化に対する認識が弱いことがわかった。そうした研究室の院生のプログラム関連のシンポジウム等への出席率が悪いという傾向もデータから明らかとなった。このことからプログラムに対する教員の理解度にばらつきが見られた。中での議論が必要だということが認識できた。教員が議論し合う機会がほとんどない中でどのように教育の合意形成プロセスを作っていくかは課題である。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

様々な企画の中で、プログラムの趣旨を繰り返し啓発する手法をとった。また広報活動の一環としてでNewsletterを全教員に配布した。プログラム採択の直後のタイミングに、研究科一丸で取り組むという全教員に対する説明会を十分な時間を持って開催し、研究科全体での議論を行なうことに力を入れるべきであった。

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

●事例3

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

- ①大学間協定締結の交渉・締結、海外インターンシッププログラムの実施をすること。
- ②外国人研究生関連規則の改正、制度の構築を行うこと。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ①大学間協定締結の対象校は、教員個人のネットワークを頼っての交渉が殆どであり、世界的なランキングで高い順位のところほど、訪問・見学招待・詳細規定の摺合せに時間がかかった。
- ②海外インターンシップでは、まず、学生の内向き志向を修正するところから始めなければならず、オリエンテーションや説明会に時間をかけた。国内インターンシップについても、学生の理解が薄く、初めは教員サイドからの働きかけなどの手間が必要であった。
- ③文系では、博士課程の外国人研究留学生の例が殆どなく、制度制定・学則改正の前段階で、状況の理解を浸透させることに長い時間がかかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

- ①時間を惜しまず真摯に交渉したため、ほとんどの海外大学と協定締結あるいは進行中である。
- ②海外インターンシップや海外研修を正課にて実施した実績ができ、先輩から下級生への宣伝効果があり、一定数の参加者が期待できるようにはなった。
- ③何度も説明や説得を繰り返したおかげか、学内の制度規則の整備が進み、博士課程の研究留学生(外国人研究生)の高額な学費負担が無くなり、積極的な受入れができるようになった他、海外研修に赴く学生への渡航費等補助が研究科の意志でできるようになる等、国際化に向けた教育取組を行いやすい環境になりつつある。
- ④国内インターンシップについても、企業数を増やすことが難しかった。これは、ただ手間の問題であると考える。

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

●事例 4

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

副専攻科目については、毎年ガイダンスで説明する等プログラムの周知に努めてはいるものの、日本人学生の履修者が少ない。副専攻プログラムの履修意義を学生全体に浸透させるのはプログラム実施期間内では困難であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

副専攻履修の意義を学生に伝えるのが難しいうえ、多くの修士および博士学生は、本来の専門分野の研究活動や科目履修で忙しく、専門分野以外の科目にまで目が向かない事が主な要因と考える。また、学生の履修者数を増やすためには、指導教員にも副専攻履修の意義を理解していただく必要がある。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

毎年初めに実施するガイダンスにて副専攻プログラムの説明を行った。また、大学院で発行する「学修の手引き」に大学院における特徴的な教育プログラムのページを設け周知したが、本プログラムの実施期間内での履修者の大幅な向上には繋がらなかった。本プログラムの履修率を向上させるには、その意義を学生と指導教員が理解しうるような説明とプログラムの履修効果をなんらかの手法で「見える化」する必要がある。

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

B. 円滑な学位授与の促進

①複数教員による多面的な指導体制の整備

●事例5

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

主となる指導教員(主指導教員)に副指導教員(2名程度)を加え、複数教員による指導体制を整備したが、副指導教員の実際の役割はきわめて限定的であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

本学は小規模大学ではあるが、多様な分野の教員が配置されている。そのため、教員の分野が比較的孤立しており、副指導教員の分野が学生のそれとかけ離れてしまうこともままあった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

教員にはたびたび複数指導体制について説明を行ったが、分野の乖離はいかんともしがたい部分があった。

考え方を变え、副指導教員の役割について学問的な指導の割合を低くし、学生生活一般に関する指導・助言等の比率を上げることが必要だったと思う。

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

B. 円滑な学位授与の促進

⑤ポートフォリオ等を活用した到達度の把握と研究指導の充実

●事例 6

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

履修指導に関しては、プログラム代表及び教育企画委員との連携のもと、各学生の指導担当教員が個々の学生の資質に照らして、各学期ごとに集計報告される履修状況を把握するとともに、全学生が行う年に各1回行われる修士論文中間発表会並びに修士論文発表会の場で到達度の総合的な状況を把握してきたが、研究テーマが多くの分野にわたることから、分野ごとの進捗状況の評価の比較が容易ではない面があった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

各研究プロジェクトの進捗状況が多様で個別の背景を持っている場合が多く、一元的な比較評価が難しい面があることから、学生の履修状況を把握するための情報共有の方法に関する検討は行ってきたものの、ポートフォリオの作成までには至っていなかった。修士論文中間発表会及び本プログラムの中間及び最終の発表会においては、十分な時間をかけたポスターセッションの場を通じて、全学生に対して全教員からの進捗度の評価を含むコメントがフィードバックされる仕組みを以前より構築しており、前述の点によりプログラムの実施内容に影響が出ることはなかったと考えている。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

プログラムの成果に関する評価は、各学生による自己評価、指導担当教員による学生の評価、学外連携組織の担当者による各プロジェクトの評価および学生のインターンシップの状況に関する評価、発表会での全教員による各発表に対する評価など、複数の評価を行い、教育目標に即した成果の状況を把握した。事後評価で指摘された通り ESD の観点からの評価基準や評価手法を取り入れることにより、改善することができると考えている。

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

③教育効果・成果についての検証と教育プログラムを改善するシステムの構築

●事例 7

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

教育プログラムを改善するため、PDCA サイクルを稼働させる体制を構築した。

PDCA それぞれに対応する委員会等を設置したが、個々の委員会の独立性を担保することが十分できなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

小規模大学であるため教員数が少なく委員が重複することもしばしばあり、たとえば実施する側と評価する側を分離することができず、客観的な評価ができたかわからないことがあった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

一部に外部委員を導入したが、学外者はプログラムを十分に把握するだけの時間もなく、主な部分は学内の教員で実行する他なかった。

委員会方式ではなく、PDCA それぞれに 1 名ずつ責任者を配置しその責任者がすべてを実施する方が機動的であり小規模大学にとって適切であると考えている。

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

●事例 8

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

各プロジェクトごとに学外の連携組織との協議によりインターンシップを連動して履修できるようにカリキュラムを組んでいるが、安全管理などの観点からインターンシップ協定書の締結を前提としつつも、締結に至らなかった事例がみられた。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

学外連携組織における責任範囲にインターンシップの受け入れを想定していない場合が見られ、大学における共同研究の方に関心が向けられていることが伺われたが、協定書の締結に至らずとも実質的にインターンシップを受け入れた組織が多く、プロジェクトの実施内容への影響は見られなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

各研究プロジェクトごとに学外連携組織と指導担当教員及び参加登録学生が緊密に協議を重ねて信頼関係を築くことができれば、インターンシップの実施そのものに影響が及ぶことはないが、学外組織側の認識を深めていくために、本活動プログラムの成果並びに教育効果を広く社会に伝えていくことが重要であると認識している。

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

●事例9

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

学生が自分の研究に照らし合わせて派遣先を決める形のインターンシップを実施した。企業、研究機関を含む他機関へのインターンシップは数にしてプログラム以前の10倍程度に増えた。その一方でインターンシップの効果を測定することは困難であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

インターンシップ派遣について事前の申請書、事後の報告書、派遣先機関の実施報告書を義務付け、インターンシップにより得られた研究成果等も報告させていたが、インターンをしなければ得られない成果なのかどうかを判定する基準を明確にできなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

インターンの効果を十分検証できなかったため、効果の有無をその後のインターンシップ派遣の審査に生かすことができなかった。

書面での審査だけでなく、担当教員が派遣先に出向くなど派遣先での業務内容を把握する手段を検討すべきであった。

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

●事例10

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムでは企業でのインターンシップは計画されなかったが、企業人による講演の機会は数多くもたれた。大学院で学んでおくこと、倫理なども含めて、大学人からは聞けない話を聞く機会となった。一方でその理解度には課題を残した。また公開型の講演会に選ばれた院生を講師としたが、この経験をすべての院生に一般化するのはやはり困難であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

教育で産業界や地域社会にあまり負担をかけてはいけないという意識があった。本プログラムではわれわれの力量を計算した結果、企業派遣には基本的に取りくまなかったが、その分、外部講師による講演会でより活発な質疑応答を促す努力が必要であったと思われる。また公開型の講演会をより広範囲の院生に広げるとは困難であり、小規模の公開セミナーの開催の効用も検証すべきであった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

外部との連携の問題は、教員と外部との折衝の機会を多く持つことがまず肝要と考える。それにより、相互で教育プログラムを立ち上げられたら理想的といえる。インターンシップ的でありつつも短期間で教育効果を上げることの出来る方策をこのプログラムの中で研究していくべきであったかもしれない。その意味で、運営委員に発想の柔軟な若手教員をより多く入れる方策もあったのではないかと振り返っている。

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

●事例 1 1

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

- ①地元自治体とのフォーラム共催、地域経済団体とのフォーラム共催、技術セミナーの実施や大学施設見学会の開催。地域連携・貢献に消極的な教員の説得が困難であった。
- ②継続してインターンシップの受け入れを協力いただける企業を開拓した。リーマンショックの影響などで、協力いただける企業が少なく、合わせて学生の顕著な大企業志向と、教育としての「インターンシップ」への誤解（インターンシップに行ったらそこに就職しなくてはいけないという勘違い）があった。

(苦勞したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ①学生同様に「大手企業」志向の教員が多く、トップシェアやオンリーワン技術を持っていても規模が「中小企業」というだけで、コミュニケーションに消極的なため、産学連携のメリットや、大学の地域貢献の重要性を何度も繰り返して説いた。フォーラムやセミナーの実施により、少しずつ改善していった。地域企業を育成する良いチャンスではあったが、企業とのコラボレーションに関心のある教員が多くないことが理解できた。
- ②インターンシップの受け入れ先開拓は、企業側にメリットが少ないためか、教育的効果への理解はあっても、交渉がうまくいくことの方が少なかった。このような点は、地元自治体は理解していたようである。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

- ①地元自治体とのフォーラム共催、地域経済団体とのフォーラム共催などをきっかけに、地元企業側から、敷居が高いという印象を持たれていたのを改善し、コミュニケーションを積極的に図り、技術のアドバイスや、共同研究などが広がった。
- ②教員の個人ネットワークを活用して、継続してインターンシップの受け入れを協力いただける企業を開拓した。産業界が我が国の将来を担う人材育成のためとして、もっと積極的にインターンシップを協力する姿勢を期待している。

③地域企業とのインターンシップには教員の努力が必要で、教員の意識がまだそこまでいっていないと考える。

《非公表プログラムの事例》

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

E. 学習・研究環境の改善

④ICT 技術を利用した遠隔教育の推進

●事例 1 2

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

- ・本プログラムでは、アジア・太平洋地域の様々な国々の大学・研究機関と連携関係を構築し、コロキウム等の場において、IT や e-Learning を活用した連携講義について協議した。e-Learning については、新たなコンテンツ作成等の試行的取組を行ったが、連携講義の実施には至らなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ・関係者間では、IT や e-Learning を活用した連携講義実現への関心は高かったものの、IT システム整備、国間でのカリキュラム調整、単位認定、時差への対応等について課題が残されており、具体的な実施には至らなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

- ・e-Learning コンテンツの開発や IT システムの運用に携わる専門的人材の確保が必要である。
- ・また、連携講義を実施する大学間での IT システム整備と互換性の検討、大学間でのカリキュラム調整、単位認定等への対応についても、十分な準備が必要である。